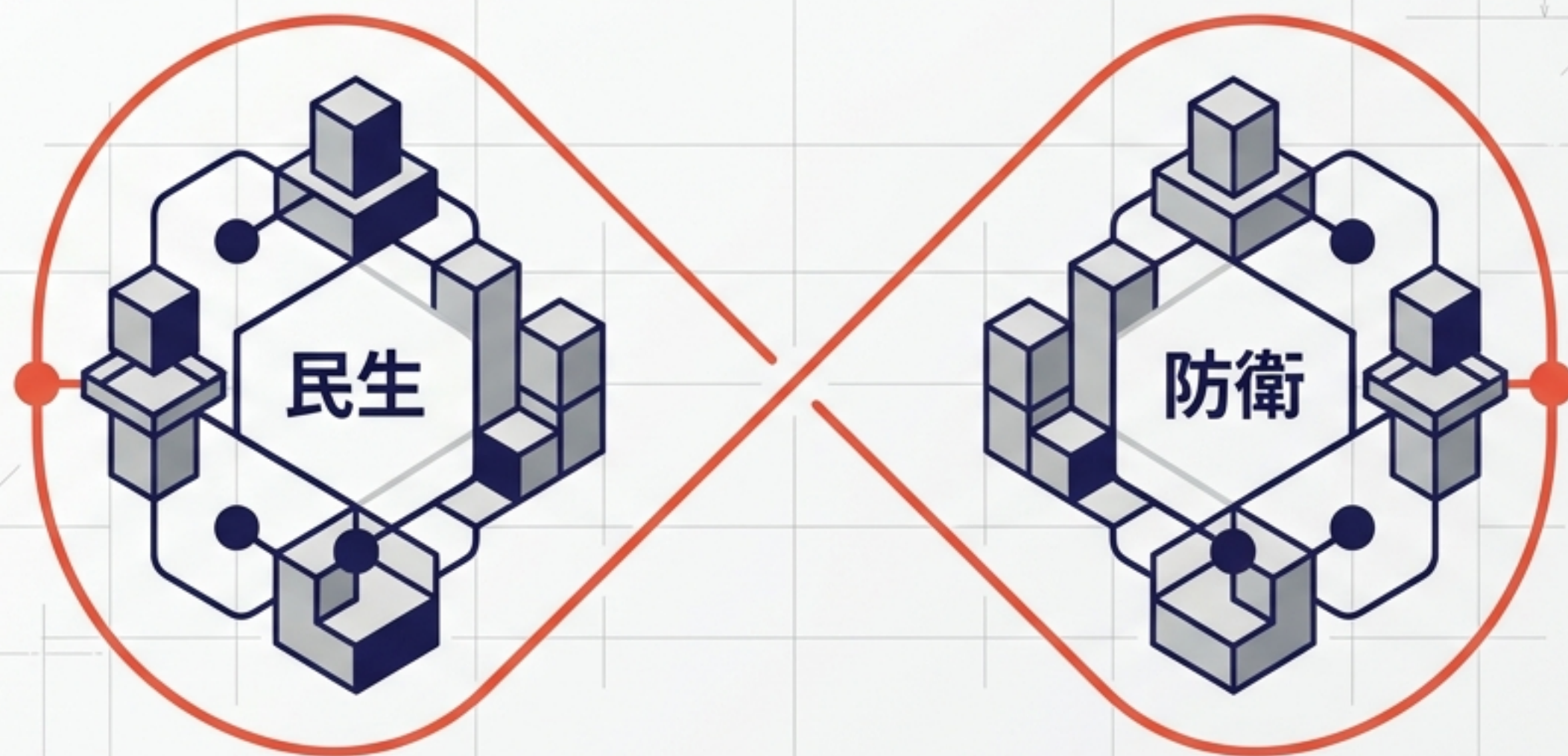


デュアルユースの真実と事業設計

誇大広告を排除し、競争力を生む「循環システム」を構築する



意思決定者が押さえるべき4つのパラダイムシフト

デュアルユースは「軍でも民間でも使える技術の一覧」ではない。
需要、量産、知財、安全保障を結ぶ事業システムである。

~~[誤り]~~ 防衛予算や隣接TAMを
単純合算する

[現実] 予算・実支出・企業売上を
厳格に分離する

~~[誤り]~~ 軍民の全仕様を一体化し
開発する

[現実] 汎用コアは共通化、任務・
秘密部分は完全分離する

~~[誤り]~~ 全てを特許化、または全て
を秘匿する

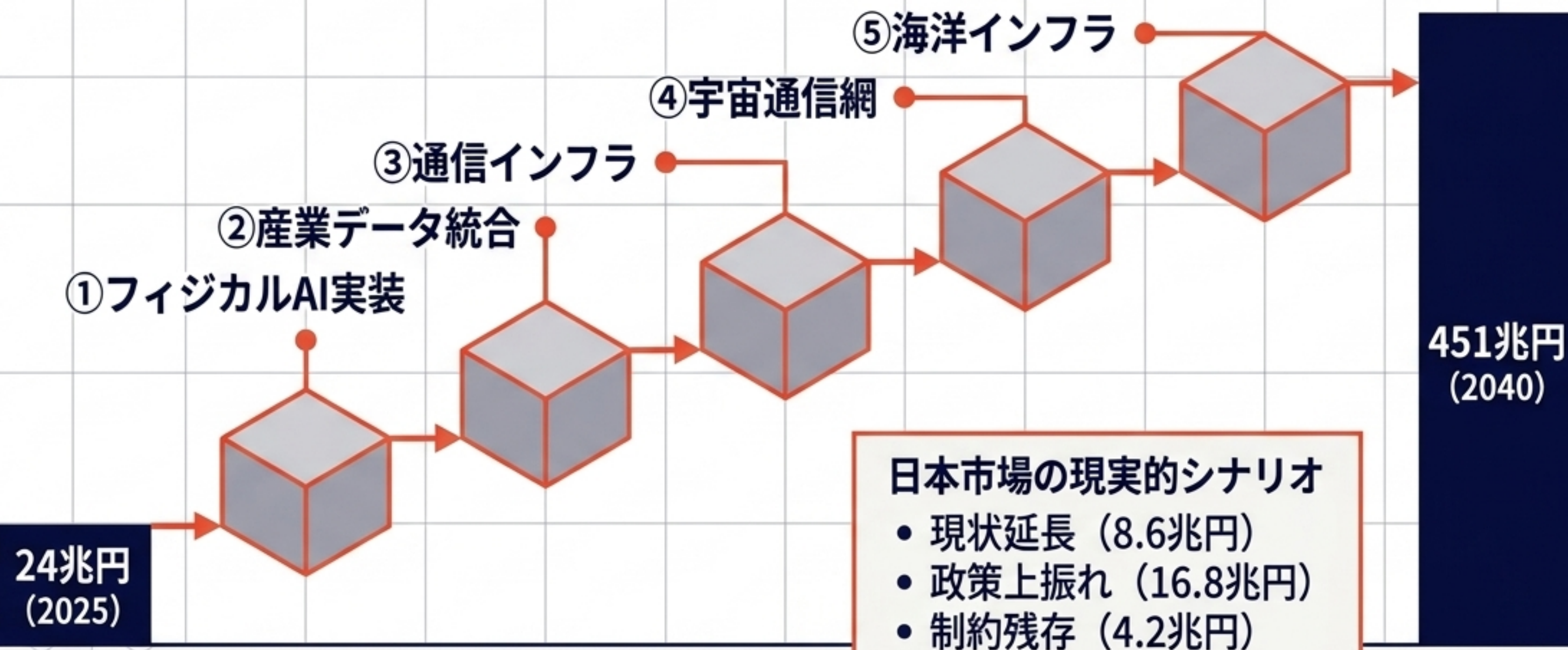
[現実] インターフェースは開き、
モデル・データ・工程は閉じる

~~[誤り]~~ 完成後に法務や輸出審査を行う

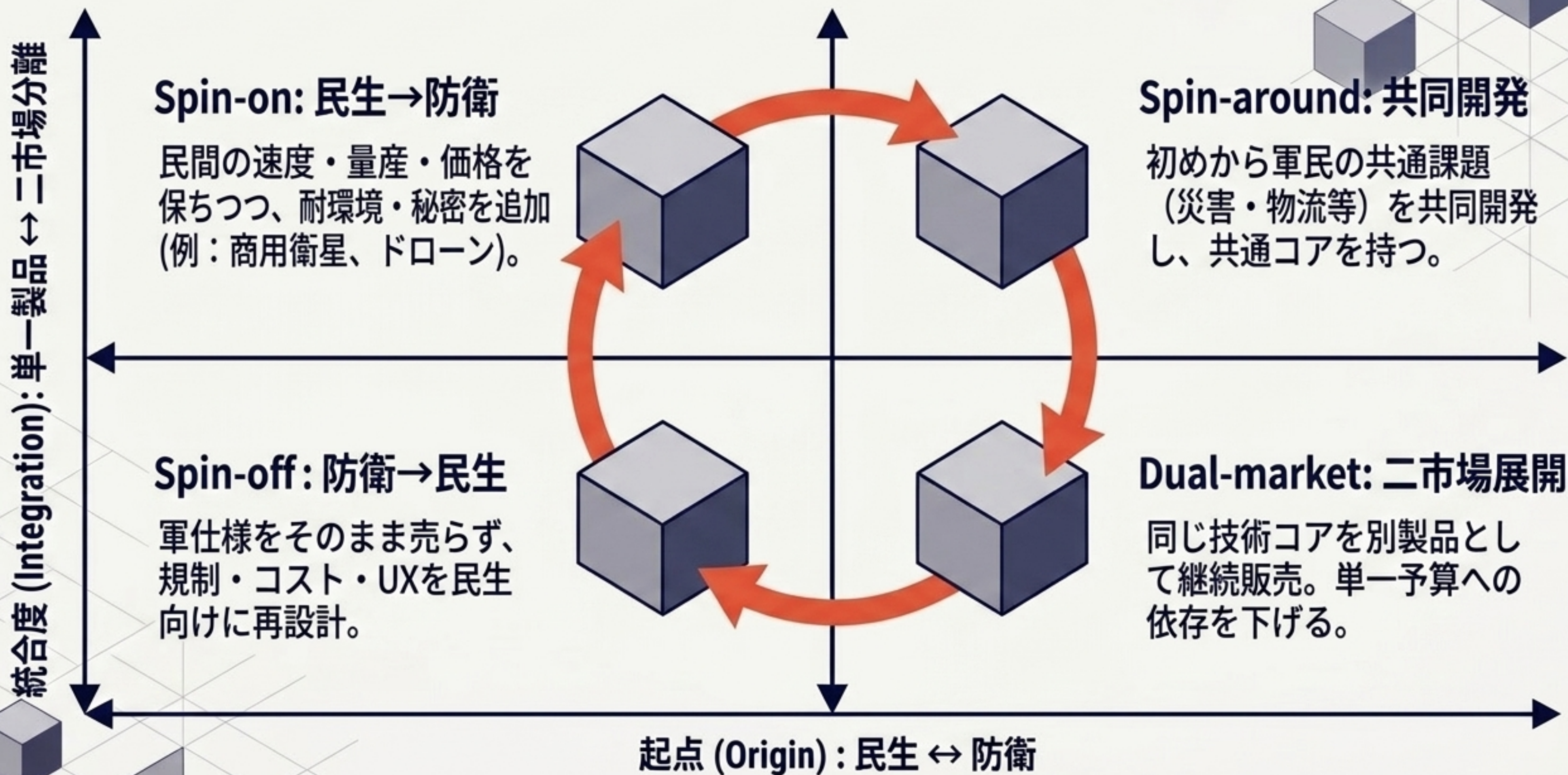
[現実] 用途確定前からG0-G7の
ゲートで再判定を繰り返す

「2040年 500兆円市場」の正体と読み方

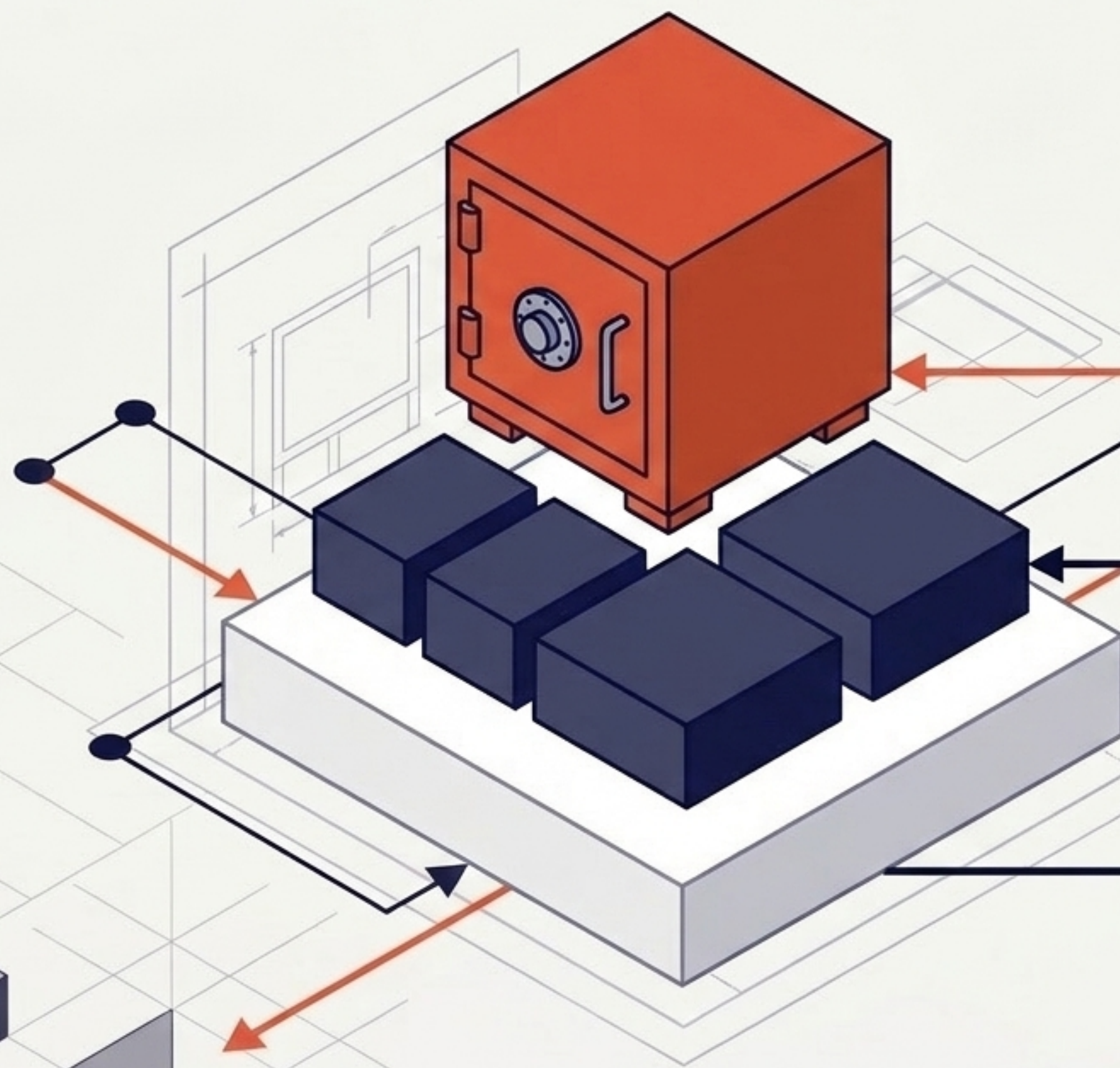
451兆円（約500兆円）は、防衛市場の公式予測ではなく、5つの隣接民生市場を合算した強気TAM（年平均成長率21.6%仮定）に過ぎない。



技術と資本を還流させる4つの主要経路



成長を止めないための「3層アーキテクチャ」設計



全顧客仕様をコアへ直書きすると、
認証・秘密・輸出規制が民生版へ伝
染 (Contagion) し、成長が止まる。

保護データ/運用（共有度：低）

- 機密データ、脅威情報、暗号鍵。

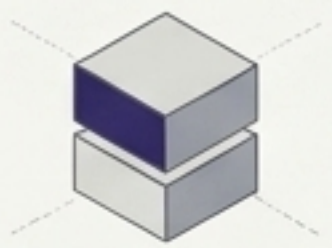
任務アダプター（共有度：中）

- 任務ロジック、耐環境、特殊部品。
顧客別だがモジュール化。

共通コア（共有度：高）

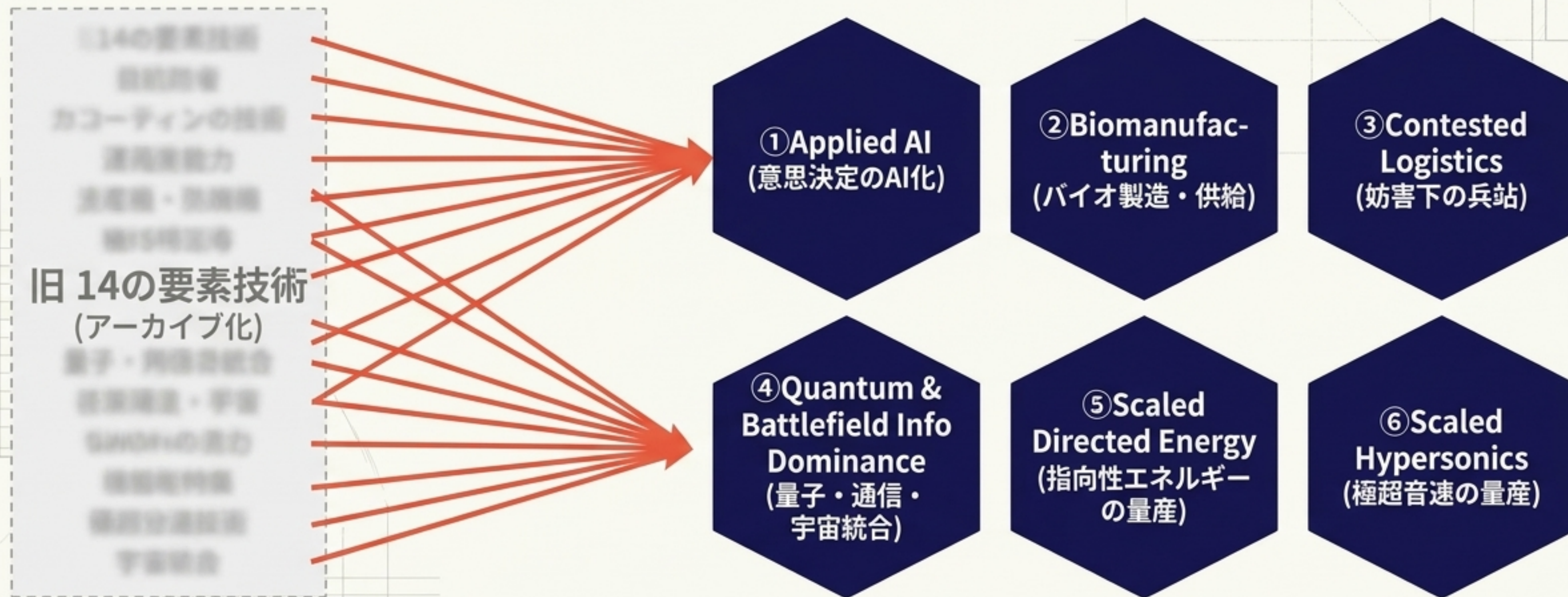
- OS、センサ処理、通信。
広い市場で再利用。
標準インターフェース。

市場を牽引する4つの企業モデルとその本質

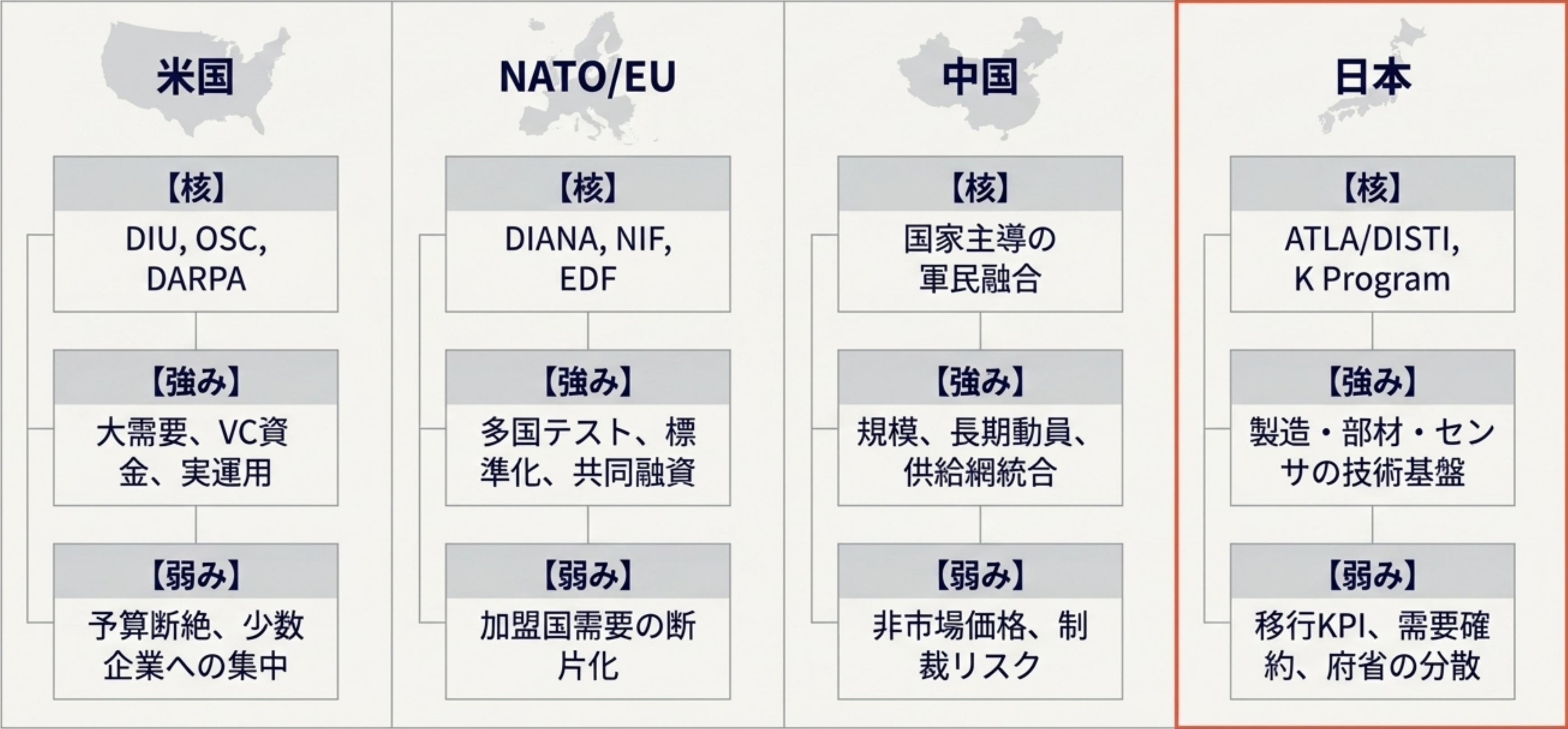
	共有基盤型 (例: Palantir)	防衛先行VC型 (例: Anduril)	民生先行スピンイン (例: SpaceX/Starshield)	真正二市場ハード (例: ドローン、海洋ロボ)
価値創出 (Value Creation)	同じデータ基盤を政府(54%)・企業(46%)で再利用。	民間資本(VC)とソフト開発手法で防衛サイクルを短縮。	商用量産とインフラを安保へ転用。	共通部品・工場で原価と品質を学習。
主要リスク (Primary Risks)	データ権利、ロックイン。	大型量産への集中。	政府依存、宇宙責任。	仕様分岐、低粗利。
特徴 (Key Trait)	現場実装とオントロジーの構築。	Defence-first / Commercial-method。	圧倒的な量産規模の転用。	製造コスト曲線の共有。

米国の戦略転換：「14の要素技術」から「6の任務・量産」へ

2025年11月、米国防総省は重点分野を再編。
単なる技術分類ではなく「任務成果とスケール（量産）」への転換である。

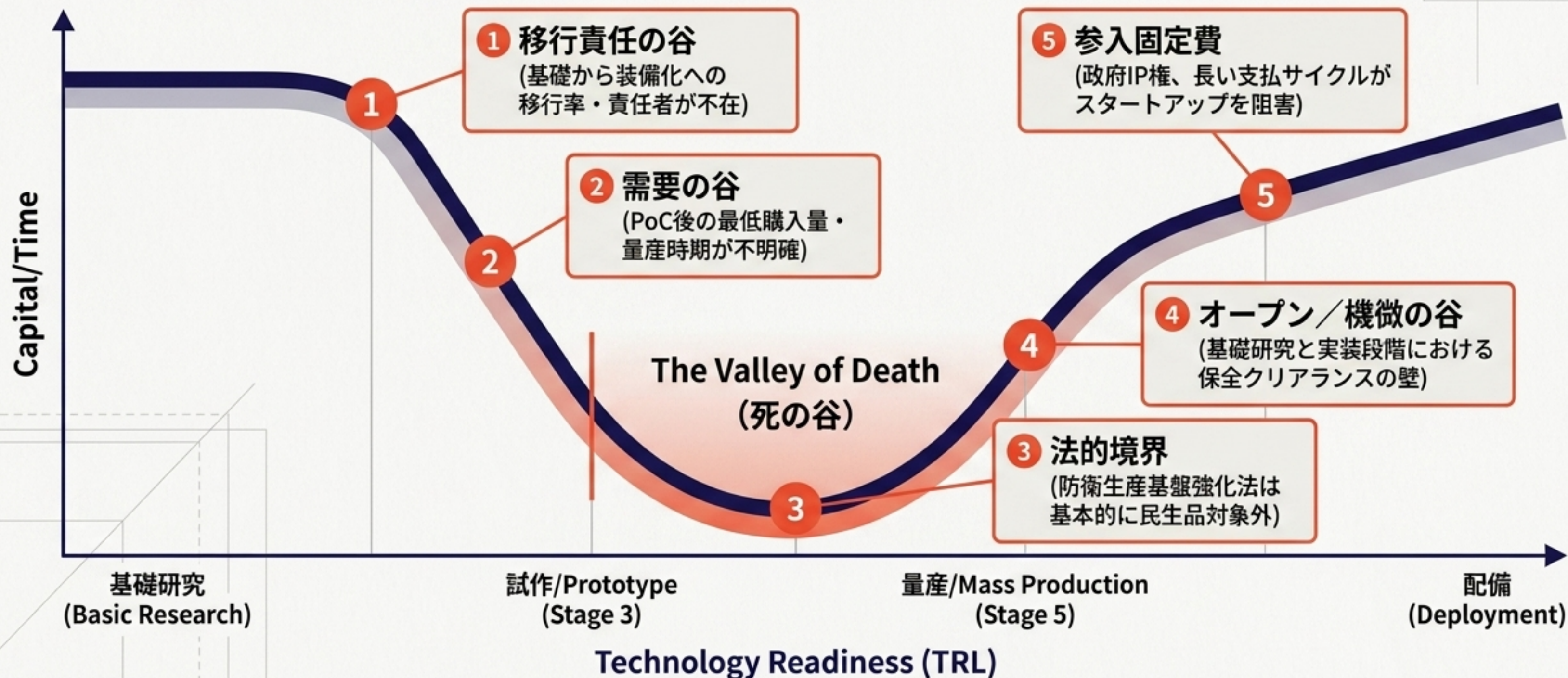


デュアルユースを支える各国エコシステムの構造比較



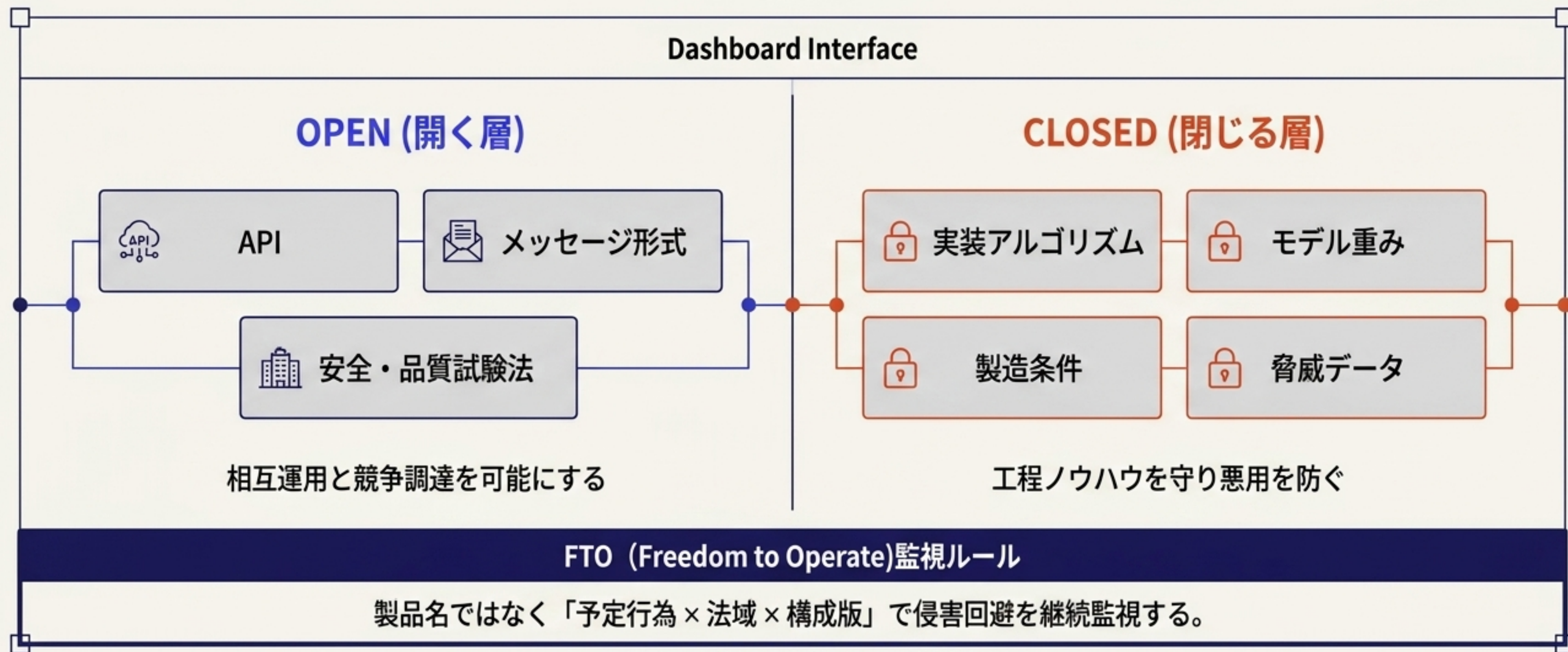
日本のパイプラインに潜む「5つの死の谷」

データ： FY2026 研究開発予算 約7,095億円。しかし、入口の資金だけでは移行率は上がらない。



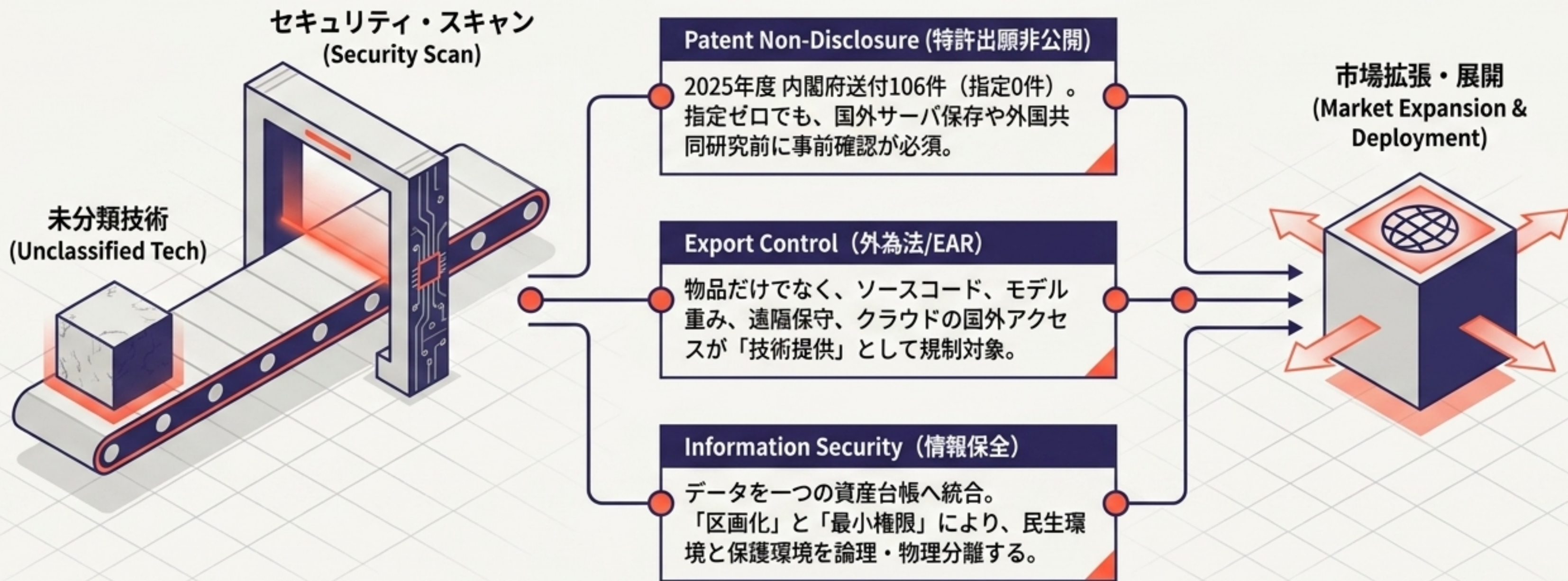
知財は特許の数ではない。「権利の束 (IP-SBOM)」のダッシュボード管理

エコシステム形成のために開く層と、模倣を防ぐために閉じる層を一行一資産で管理する。

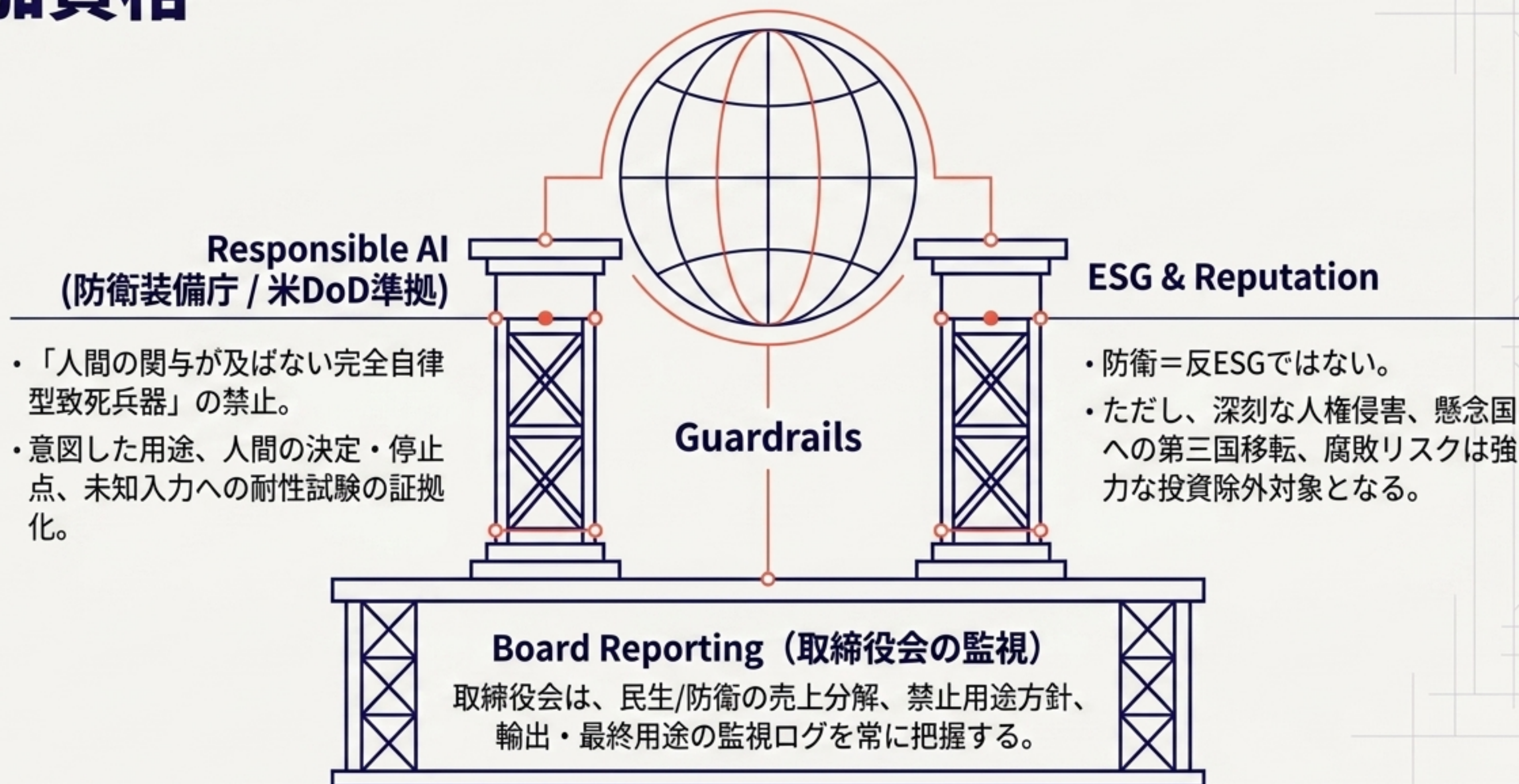


ガバナンスは後付けの制約ではなく、市場拡張の「許可証」である

知財、データ、輸出、秘密、研究セキュリティ、責任あるAIはイノベーションの後付け制約ではない。共通コアを安全に複数市場へ展開するための製品アーキテクチャであり、信頼と輸出可能性を生む成長基盤である。



責任あるAIとESG：国際サプライチェーンへの参加資格



デュアルユース製品の開発・管理アセンブリライン

Gate G0-G3 (審査)

用途、法域・情報区分、IP-SBOM
・FTO、相手方DDのクリア。

Gate G4-G5 (設計・検証)

共通コアへの規制伝染を防ぐアーキテ
クチャ設計と、未知入力試験の証拠化。

Gate G6-G7 (配備・監視)

出願・輸出審査の通過と、
用途逸脱・再移転の継続監視。



Synthesis Takeaway

ガバナンスを設計初期から組み込むことで、
後工程の停止や市場分断を防ぐ。

企業が実行すべき「90日間」のロードマップ

	0～30日 (棚卸しと方針)	31～60日 (審査基準と設計)	61～90日 (パイロットと合意)
 経営 (Management)	取締役会の許容/禁止用途・顧客方針の決定。	→ 案件受付・上申基準の設定。	→ 1案件をG0～G7ゲートで試験運用。
 技術 (Tech/IP)	既存IP-SBOM、政府資金、秘密の棚卸し。	→ BIP/FIP配分、上位20件のFTO、共通コア/任務層の分離設計。	→ 開くIF/閉じるコアの標準化ロードマップ。
 事業 (Business)	民生/防衛の共通ミッション選定。	→ 試験計画と単価仮説の構築。	→ 政府・民生各1ユーザーとの実証合意。

結論：技術の単体性能ではなく 「事業の循環速度」で勝つ

[避けるべき指標]

単純なTAM推計、
試作・公募件数のみ、
契約上限額の合計、
国内調達比率だけ。

[追うべき真のKPI]

次段階への移行率、
実支出と民生売上高、
共通コア比率とライセンス、
納期の短縮と原価低下。

1 技術・事業の真の勝者:

勝つのは最高性能の単品ではなく、共通コア、標準IF、短い更新、量産学習、現場導入を複数市場で再利用できる企業である。Palantirが示すのはデータ統合と現場実装、Andurilが示すのは商用開発・資本・量産手法の防衛転用による「事業の循環」である。

2 日本の課題:

探索、橋渡し、迅速実装、生産基盤、装備移転、情報保全の制度部品は揃い始めた。次の課題は制度間の移行責任、量産需要、ユーザー・データ、スタートアップ固定費、民生波及KPIを埋め、「加速循環」を実現することである。

制度の部品（探索、橋渡し、情報保全）は揃い始めた。次のフェーズは、政府がアンカー需要となり、企業が共通コアを世界市場へ展開する「加速循環」の実現である。